

匹見町埋蔵文化財調査報告第43集

—中山間地域総合整備事業(広域連携型)益美地区に伴う発掘調査報告書—

# 長尾原遺跡

2003年3月

島根県匹見町教育委員会

—中山間地域総合整備事業(広域連携型)益美地区に伴う発掘調査報告書—

# 長尾原遺跡

2003年3月

島根県匹見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成14年度に行った中山間地域総合整備事業（広域連携型）益美地区事業に伴う、長尾原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会				
調査主任	匹見町教育委員会主任主事			山本 浩之	
調査補助員	匹見町文化財保護専門員			渡辺 友千代	
	匹見町埋蔵文化財調査室			栗田 美文	
遺物整理員	匹見町埋蔵文化財調査室（臨雇）			大賀 幸恵	
				大谷 真弓	
				渡辺 静	
				青柳 智恵美	
				岡本 余緒	
調査指導	島根県教育委員会文化財課				
事務局	匹見町教育委員会教育長			松本 隆敏	
	匹見町教育委員会次長			大谷 良樹	
発掘作業員	栗田 修	斎藤 幸夫	中尾 春夫	藤井 一美	
	渡辺 静	大館 高義	森 伊佐男	長谷川時子	

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの堀野技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多人な協力をいただいた。また、山口大学人文学部の中村友博教授をはじめ、広島大学名誉教授の潮見浩先生、同文学部の河瀬正利教授、そして陶磁器研究家の松本美樹氏が来跡されており、なかでも美東町教育委員会の池田洋文社会教育課長には貴重なご助言を賜るなど、多方面から本書の充実に協力いただいたことに対してお礼を申し上げるものである。

なお、発掘現場においては、土地所有者の平谷勉氏をはじめ、また地元の方々に終始多人な協力を得て、ここに報告することができたことに対して感謝を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構-P、上坑状遺構-SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、調査補助員及び遺物整理員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・山本がともに行なった。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過 .....	(渡辺友千代) .....	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	.....	1
第2章 地区の概観 .....	(渡辺友千代) .....	2
第1節 地形的概観.....	.....	2
第2節 歴史的概観.....	.....	2
第3章 調査概要 .....	(山本 浩之) .....	4
第1節 遺跡立地と調査区設定.....	.....	4
1. 遺跡の所在地と立地.....	.....	4
2. 調査区の設定.....	.....	5
第2節 基本的層序と層位状況.....	.....	8
第3節 遺構.....	.....	9
1. はじめに.....	.....	9
2. 検出遺構 .....	.....	13
第4章 出土遺物 .....	(山本 浩之) .....	15
第1節 はじめに .....	.....	15
第2節 実測遺物 .....	.....	17

## 挿図・図表目次

第1図 遺跡位置図 .....	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図 .....	2
第3図 地形断面図 .....	3
第4図 調査区配置図 .....	4
第5図 上層図(1) .....	5
第6図 上層図(2) .....	5
第7図 遺構指示図 .....	6
第8図 遺構陥入状況図(1) .....	7
第9図 遺構陥入状況図(2) .....	8
第10図 遺構陥入状況図(3) .....	8
第11図 遺構陥入状況図(4) .....	9
第12図 遺構陥入状況図(5) .....	9
第13図 サブトレングル断面図 .....	10
第14図 S K13遺構陥入状況図 .....	10
第15図 遺構図 .....	11
第16図 遺物実測図(1) .....	16
第17図 遺物実測図(2) .....	18
第18図 遺物実測図(3) .....	20
第1表 遺構計測表 .....	7
第2表 遺物集計表 .....	15

# 図版目次

図版1 烏瞰する調査地点と周辺部

図版2

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. A調査区の北壁（南西から） | 2. A調査区の東壁（南西から） |
| 3. B調査区の西壁（南東から） | 4. B調査区の南壁（北東から） |
| 5. 遺物の出土状況（南東から） | 6. 遺物の出土状況（北東から） |
| 7. 焼土の出土状況       | 8. 石灰石の出土状況      |

図版3

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 弥生土器の出土状況 | 2. 瓦器の出土状況  |
| 3. 土師器の出土状況  | 4. 陶磁器の出土状況 |
| 5. 陶磁器の出土状況  | 6. 陶磁器の出土状況 |
| 7. 石臼の出土状況   | 8. 金属滓の出土状況 |

図版4

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1. A・B調査区に露頭した集石群（北から）  | 2. A・B調査区に露頭した集石群（南から） |
| 3. SK20の上面に検出された集石（西から） | 4. SK16の上面にみられた焼石（北から） |
| 5. SK02～06の表出状況（東から）    | 6. SK09の表出状況（南西から）     |
| 7. SK13の表出状況（北西から）      | 8. SK13の表出状況（北東から）     |

図版5

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. SK15の半截状況（南東から）         | 2. SK15の検出状況（南東から）       |
| 3. SK16の半截状況（南西から）         | 4. SK16に検出された石灰石（南西から）   |
| 5. SK19の半截状況（北東から）         | 6. SK22の4分法による検出状況（北東から） |
| 7. サブトレンチにおける遺構の検出状況（南西から） |                          |
| 8. サブトレンチにみられる遺構の陥入状況（西から） |                          |

図版6

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. A調査区東半の遺構検出状況（南西から） | 2. B調査区の遺構検出状況（北東から）     |
| 3. 十字トレンチ北辺部の完掘状況（南から） | 4. 十字トレンチ東一西辺部の完掘状況（東から） |
| 5. 調査区の遺構完掘状況（南から）     |                          |

図版7

- |                         |           |
|-------------------------|-----------|
| 1. 繩文土器・弥生土器・石器・土師器・瓦器類 | 2. 瓦器類    |
| 3. 輸入陶磁器類               | 4. 国産陶磁器類 |

図版8

- |          |               |
|----------|---------------|
| 1. 石臼・砥石 | 2. 金属器類       |
| 3. 金属滓   | 4. 石灰石・焼土・炭化物 |

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

長尾原遺跡は「益美地区県沿中山間地域総合整備事業」に伴い、平成13年度における詳細分布調査で明らかになったものであった。

したがって遺跡であることが判明した以上、事業者（島根県益田農林振興センター）側との協議が必要となったので、平成14年1月25日に2者合同で協議を行なったのである。事業者側はトンネル工事の残石処理のために、該当遺跡の上位部を剥ぎ取って3mばかりの盛土とし、そしてその後、水田に整地するとの旨であった。そうした状況にあっては遺跡に支障をきたすことは間違いないと判断し、ならば平成14年度に本格調査を実施することに決定したのであった。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査にあたり、島根県教育委員会宛に平成14年5月22日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を提出し、現地調査は平成14年6月3日から始めたのである。

調査の結果、層序は5層からなっており、このうち3層が本遺跡における文化層として捉えられるものであった。該当層には中世期から近世前半の陶器類・瓦器・土師器等とともに金属洋などが検出された。また数10基の石組を伴う炉跡も出土していて出土遺物から、これらは金属関係の精錬跡らしい様相を示していると判断されたのであった。兎にも角にも多くの石組炉や敷石ふうの砾石の実測には時間を要し、また重複した遺構の検出においては、その切り合い関係が把めず困難を極めたのであった。

なお、発掘中の平成14年7月30日には山口大学人文学部の中村友博教授、また陶磁器類の研究家である松本美樹氏が来跡された。そして同年9月12日には広島大学名誉教授の潮見浩先生、同文学部の河瀬正利教授が訪れられ、多方面からご助言・ご教示をいただくことができたのであった。

(渡辺友千代)



第1図 遺跡位置図

## 第2章 地区の概観

### 第1節 地形的概観

長尾原遺跡が所在する美濃郡匹見町の澄川地区は、匹見町域の北西側に位置（第1図）し、大半は山野で占められているという山間僻地である。

広島県境なす中国山地の分水嶺に源を発した匹見川本流が貫流しているが、人文活動域といえばその流域、また支流とが相会する僅かな谷平地に求めるほかないという立地下にある。

標高は流域の低位部で約120m、山地の高位部は500~700mを測って立ちはだかっていて、その比較差は大きい。しかも中國山地と併行する北東~南西方向に縦走する3つの断層地溝帯は、匹見川の自然的流下を遮断するかのように阻んでいるため、河は直角的な折曲を繰返し、それがより深い渓谷を形成しているという要因の一つでもある。したがって、可耕地といえば、河が相会する合流地や、河が周流して河岸段丘を形成した狭小地しかないのである。



第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

学校・郵便局・公民館などの公共施設に僅かにみることができるが、凡そ昭和30年代まで活計を支えた農林業もその後は衰退し、過疎化の一途を辿っているのが現状であるといえる。

さて原始・古代遺跡は、現在の人文活動域といえる河の相会地や、また河が周流して僅かな河岸段丘を形成する谷平地とほぼ一致して分布する（第2図）。この条件を満たしているのが持三郎であり、ここでは縄崎式上器が出土している芝遺跡、また縄文後晩期のものと考えられる舟戸遺跡もある。また上流側の小浜遺跡では縄文後晩期のものと、多少の弥生土器も伴って複合した遺跡もみられ、該当地区においては比較的縄文人にとっては最適地であったことを窺わせている。また土井原のアガリ遺跡では縄文早中期と想定される織維土器、そして羽島下屏式の縄文前期初頭の土器、そして春日式などが出土していて、縄文化の搬入経路を探る上にも貴重なものといえよう（第2図）。

### 第2節 歴史的概観

本地区というのは、匹見町域における大字単位でいう澄川地区をいうのであるが、その地名、そしてその区域は近世期から現在までほとんど変わっていない。明治22年から昭和30年の匹見上村、道川、匹見下村の三ヶ村が合併するまでは、該地区には匹見下村の役場が設けられていて、その中心的役割を果たしてきたが、澄川という地名そして村域も消滅することはなかったのであった。こうした旧村時代の面影は小

このように縄文遺跡は分布しているものの、弥生遺跡は極めて貧弱で、また該当地区においては今のことろ古墳は確認されていないという疎密度がみられる。これは立地環境と時代背景とが絡み合って表出した結果であろうが、いずれにしても縄文遺跡の優越性は気になるところである。

中世遺跡としては、まず持三郎の山根ノ下遺跡をとり上げることができる。本遺跡からは鎌倉末期の住居址が検出されているが、和鏡・鉄劍、また青・白磁などの珍品の出土などから、該当期における支配階級者の住居跡であったと想定されている。また山城としては七井原に叶松城跡があり、その山裾には寺戸氏の居館であったらしい「ドイ」の地名が遺っている。そして1キロ上流側の長尾原には、その枝城だったと想定される城跡が存在するなど、そこには山間地における地侍たちの割拠の様子を窺いできるものとして注意に値するであろう（第2図）。とくに面白いのは、澄川八幡宮に相殿されているという丹生都神のことである。本報告する生産遺跡として捉えられる長尾原遺跡と何らかの関わりがあるのではないかと思われてならないのである。具体的に立証することはできないが、おそらく該当地を支配した寺戸氏も本遺跡に深く関与していた可能性もあるのではないかと考えられる。実際にこの寺戸氏は、天文年間（1532～1554）に丹波国から丹生都神を勧請して供奉したという記録が残っていることから、丹生都神と寺戸氏、そして寺戸氏と関わりを持ったであろう長尾原遺跡、となるのではないかと想定しているのである。



第3図 地形断面図

また美都の丸山銅山と同鉱床にあるということから、本地区でも金山・魚ヶ原などといった銅採掘坑跡も少なくないのである。現に同地の谷口は、藩制期において銅生産地として大森銀山領でもあったことからも頷かれよう。このほか製鉄遺跡として能登に丸瀬鉛跡、そして火ノ口鉛跡があった。なお『角川日本地名大事典-32-島根県』によると、明暦2年（1656）のものとして、本地区的「戸数137、村高353石とある」ということを記して、封じることにしたい。

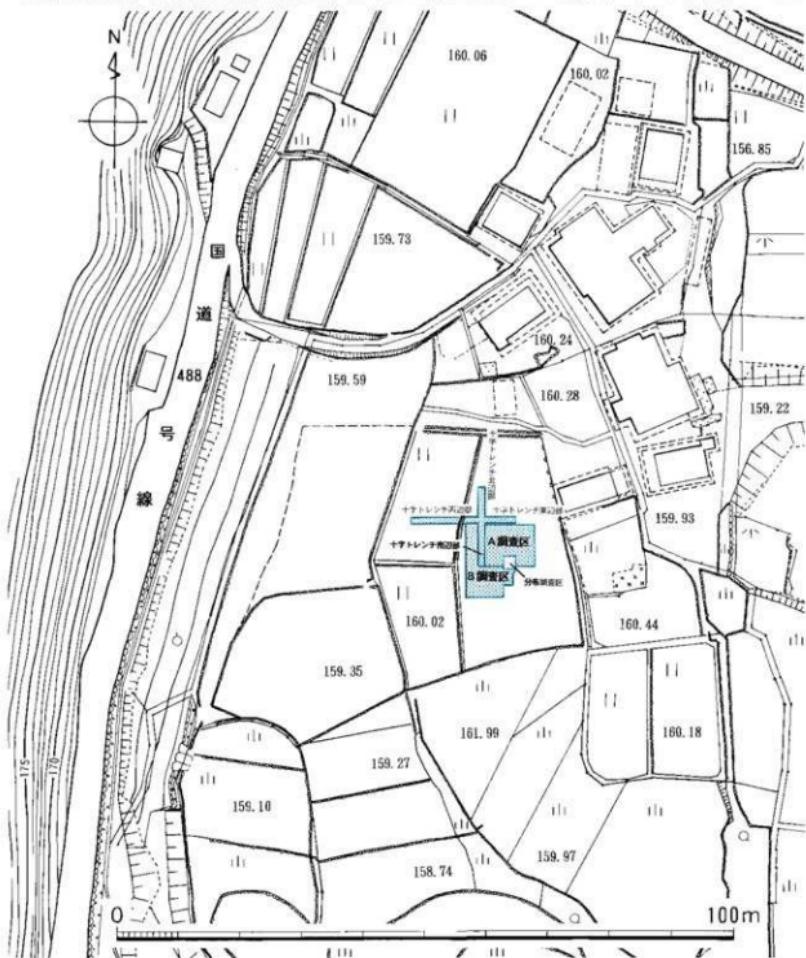
（渡辺友千代）

### 第3章 調査概要

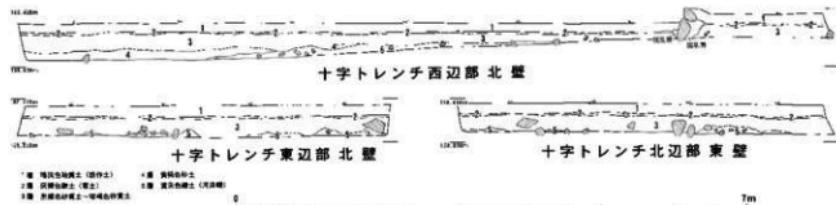
#### 第1節 遺跡立地と調査区設定

##### 1. 遺跡の所在地と立地

調査対象地は、島根県美濃郡四見町大字澄川イ797内3番地ほかに所在し、そこは小字名でいう家



第4図 調査区配置図



第5図 土層図(1)

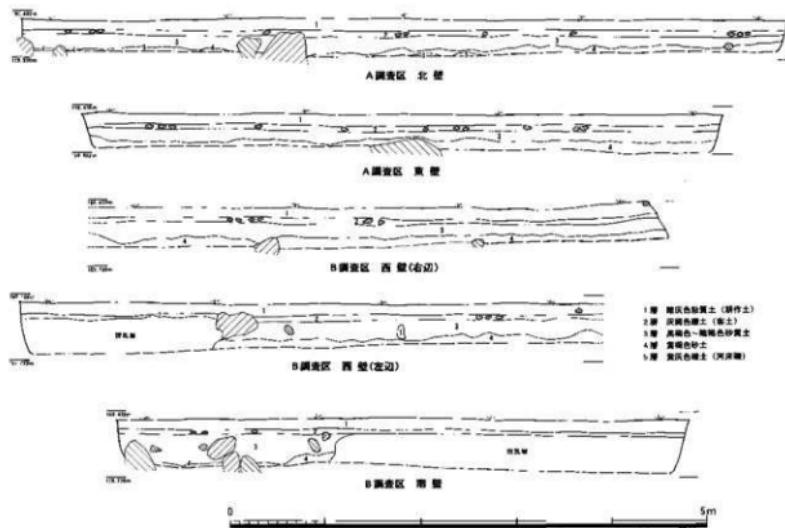
ノ彌リといわれる場所である。ただし、地点城はその隣地名をもって、長尾原（なごうばら）といわれていることから、遺跡名においてはその通称をもって称名したのである。

本調査地は、西側の山地に形成された二日月状を呈する右岸の上流域に立地し、匹見川はその端部を大きく蛇行して南西流している。該地は、数段に派生した河岸段丘の狭小な可耕地に位置しており、また山裾に周流する旧河道路跡を遺すことから、おそらくは巾州状に派生した立地環境を窺えるもので、その西側には山地がせまり、山裾には国道488号線が北東一南西方向に貫道している。

調査対象地は、その段丘面の上位部にあたり、標高約160m、河川との比高差約10mを測る砂質性の水田地に立地するといった景観を呈している（第2～3図・図版1）。

## 2. 調査区の設定

調査区設定にあたっては、平成13年度に実施した詳細分布調査において、凡その状況を把握していくので、遺跡の本命と思われる該地点域の北側に任意に調査区を設定することにした。ただし広がりも把握しておく必要があったため、その既掘していた調査区から北側に向かって約10m地点に基点杭

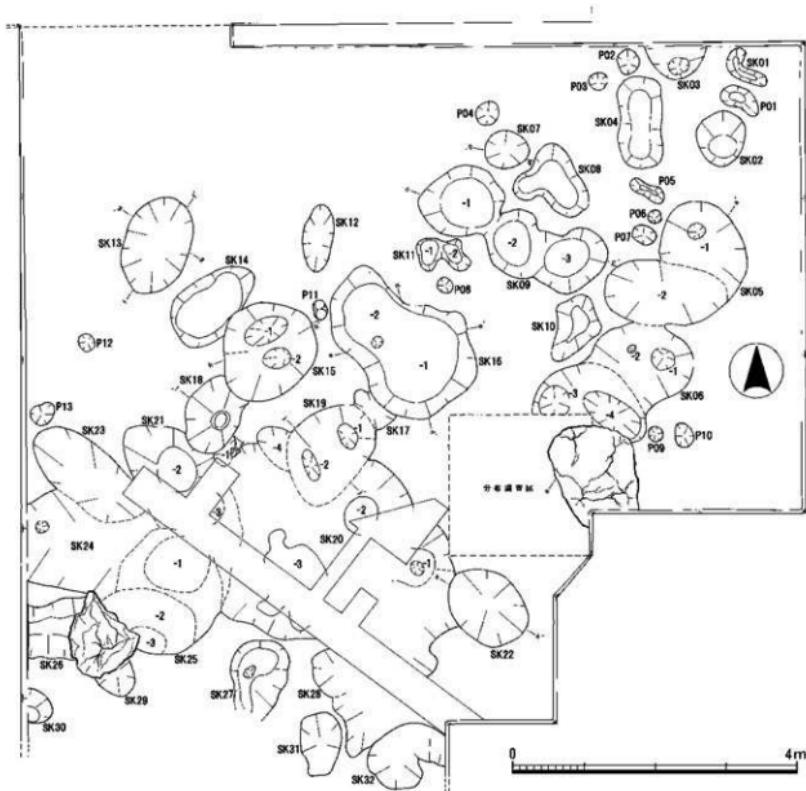


第6図 土層図(2)

を設け、そこを中心にトレントを設定することから始めたのである。

そのトレントは幅1mのもので、基点杭から北一南方向に向かって13m、またクロスして東一西方向に17m測った十字形のものとしたもので、トレント名も「十字トレント」と呼称することにしたのである。

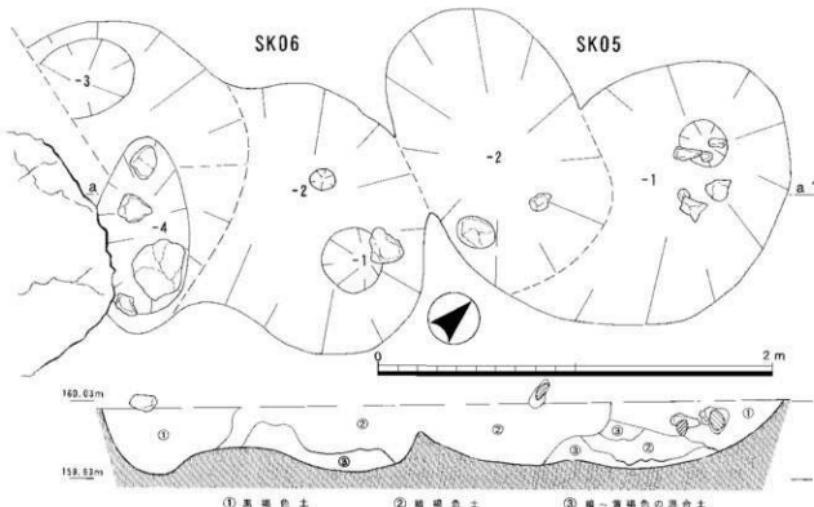
その掘削からは、西辺端に向かっては、おそらく河道の生成等によるところの削平状況を看取できたとともに、一方では南から東側にかけての方向に遺物の分布状況等によって遺跡の広がりを想定できしたことから、十字トレントの南・東辺部に、A調査区と称名する区形を設定して50.8m<sup>2</sup>を掘削したのであった。またそこからは、遺構なども確認されたことから、さらに該区を囲むように拡張区を広げて、B調査区として47.75m<sup>2</sup>を掘削するに至り、最終的には総発掘面積は127.55m<sup>2</sup>となったものである（第4図）。



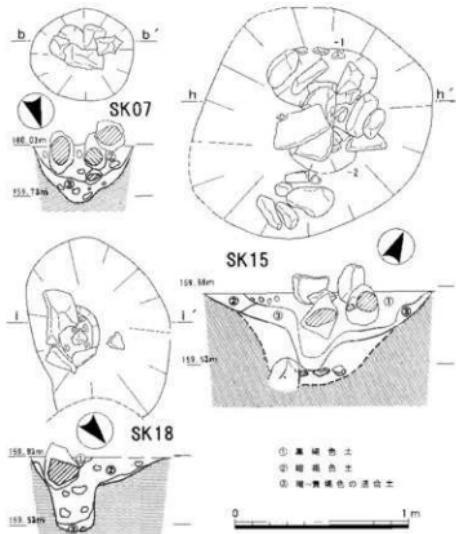
第7図 遺構指示図

遺構名	長径 cm	短径 cm	高さ cm	表面深さ高さ cm	性状物	地 土	施 設	遺構%	縦幅 cm	横幅 cm	直立深さ cm	底面深さ cm	底面形状 u	底面物	地 土	施 設
P01	28.0	59.0	14.0	160.0/0				SK03	92.0	140.0	29.0	159.950	多量	多量	瓦砾	瓦砾
P01	30.0	36.0	9.0	160.0/0				SK04	67.0	138.0	20.0	159.940	少量	少量	土砂	土砂
P03	24.0	—	—	160.0/0				SK05	12.0	151.0	—	—	少量	少量	土砂	土砂
P04	31.0	36.0	20.0	160.0/0				SK05-1	—	—	10.0	159.940	—	—	—	—
P05	17.0	52.0	14.0	160.0/0				SK05-2	—	—	—	159.950	—	—	—	—
P06	15.0	39.0	11.0	160.0/0				SK06	130.0	230.0	—	—	少量	少量	瓦砾	瓦砾
P07	25.0	33.0	7.0	159.980				SK06-1	—	—	32.0	159.960	—	—	—	—
P08	28.0	24.0	9.0	159.970				SK06-2	—	—	29.0	159.950	少量	少量	—	—
P09	20.0	21.0	13.0	160.0/0				SK07	—	—	64.0	12.0	159.930	—	—	—
P10	25.0	35.0	10.0	159.990				SK08	80.0	112.0	16.0	159.940	少量	少量	瓦砾	瓦砾
P11	18.0	38.0	12.0	160.0/0				SK08-1	108.0	140.0	—	—	少量	少量	瓦砾	瓦砾
P12	23.0	25.0	8.0	159.970				SK09	—	—	35.0	159.930	—	—	—	—
P13	27.0	36.0	19.0	159.960				SK09-1	—	—	29.0	159.950	多量	多量	瓦砾	瓦砾
SK01	20.0	47.0	13.0	160.0/0	少量 瓦砾	少量		SK09-2	—	—	31.0	—	—	—	—	—
SK02	60.0	78.0	10.0	160.0/0	少量 少量			SK09-3	—	—	34.0	12.0	91.0	—	—	—
SK03	—	—	53.0	160.0/0	少量 少量			SK09-4	—	—	35.0	—	159.940	—	—	—
SK04	60.0	132.0	20.0	160.0/0	少量 少量 瓦砾	少量 瓦砾		SK09-5	—	—	37.0	—	159.940	—	—	—
SK05	120.0	202.0	—	—	少量 少量 土砂	少量 土砂		SK09-6	—	—	12.0	—	159.920	—	—	—
SK06-1	—	—	40.0	160.0/0				SK10	125.0	237.0	—	—	少量	少量	瓦砾	瓦砾
SK06-2	—	—	28.0	160.0/0				SK11	—	—	20.0	—	159.940	—	—	—
SK07	118.0	228.0	—	—	少量 少量 瓦砾	少量 瓦砾		SK12	—	—	23.0	—	159.950	—	—	—
SK08	—	—	36.0	160.0/0				SK12-1	—	—	42.0	—	159.920	—	—	—
SK08-1	—	—	27.0	160.0/0				SK12-2	94.0	128.0	72.0	—	159.930	少量	少量	瓦砾
SK08-2	—	—	27.0	159.990				SK12-3	92.0	185.0	21.0	—	159.920	—	—	—
SK08-3	—	—	36.0	159.990				SK14	—	—	16.0	—	159.970	—	—	—
SK08-4	—	—	36.0	159.990				SK15	121.0	178.0	—	—	少量 少量	少量 少量	瓦砾	瓦砾
SK09	34.0	61.0	31.0	160.0/0	少量 少量	少量		SK15-1	—	—	33.0	—	159.920	—	—	—
SK09-1	44.0	110.0	15.0	159.990	—	—		SK15-2	—	—	26.0	—	159.920	—	—	—
SK09-2	—	—	32.0	159.980	少量 少量	少量		SK15-3	—	—	29.0	—	159.920	—	—	—
SK09-3	—	—	16.0	159.990	少量 少量	少量		SK16	72.0	—	16.0	—	159.920	—	—	—
SK10	36.0	60.0	25.0	159.990	—	—		SK17	65.0	—	21.0	—	159.780	少量 少量	少量 少量	瓦砾
SK11-1	—	—	7.0	159.970	—	—		SK18	—	—	9.0	—	159.820	少量 少量	少量 少量	瓦砾
SK11-2	—	—	13.0	159.970	—	—		SK19	65.0	—	13.0	—	159.810	少量 少量	少量 少量	—
SK12	42.0	96.5	12.0	159.990	—	—		SK20	68.0	90.0	0.0	—	159.920	—	—	—
								SK21	68.0	90.0	0.0	—	159.920	少量 少量	少量 少量	瓦砾
								SK22	—	—	110.0	25.0	159.820	少量	少量	土砂

第1表 遺構計測表



第8図 遺構陥入状況図(1)



第9図 遺構陷入状況図(2)

## 第2節 基本的層序と層位状況

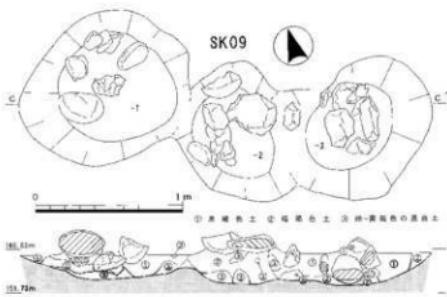
本遺跡における基本的層序は、1層の暗灰色粘質土（水田耕作土）、2層の灰褐色礫土（客土）、3層の黒褐色～暗褐色砂質土（上部に酸化鉄の含浸するもの）、4層の黄褐色砂土、5層の黄灰色礫土（河床礫）の順で堆積していた（第5・6図・図版2）。

各調査区においても基本的には上述のように堆積しているが、B調査区の南端部では基本層位とは異なる部分もみられて、10~60cm大の大型の円礫が隙間をもって集積している状況を確認することができた。おそらくは、後世において人為的に擾乱されたものと判断できたもので、以下、基本的層

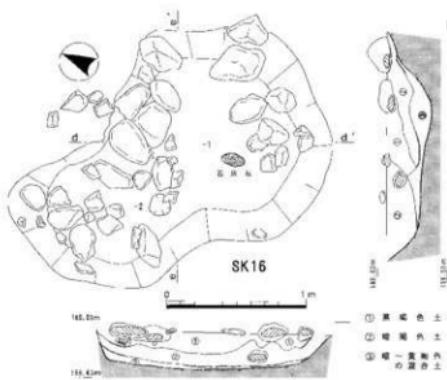
序にしたがい上位から下位へと、その状況をみていくことにする。

そのうち1層の暗灰色粘質土は、層厚10~15cmを測って平均しており、2層とする灰褐色礫土の層厚は、尖滅部分から厚いところで8cmを測り、凡そ該区の北東部辺に薄く、その逆に南西部辺に向かって厚く堆積するという傾向がみられた。

また3層は、その上位に酸化鉄の含浸する砂質土で、その層厚は10~40cmを測り、総体的にみて、該区の南西方向に向かって厚く堆積していた。これは前述した中州状の形成を呈したと想定される斜度に関係したものと考えられ、一方でその堆積状況から、水田造成等による削平が行われたものと考えられたもので、おもに北東側は、その影響を強く受けたものと捉えられる。また本層を色調から分層していないが、概して上位部は黒褐色、下位部に向かっては暗褐色を呈しており、上位部から中位部に向かって、少量～多量の焼土痕や炭化物を漸次散見できたとともに、その上位部からは陶磁器などを中心とした約400点の中世から近世初期にかけてのものが出土して、また下位部からは繩文土器・弥生土器・石器類などの縄文・弥生期のものが少量出土している。



第10図 遺構陷入状況図(3)



第11図 遺構陷入状況図(4)

そして遺構は、その多半が同一層内で検出されたもので、中には下位層に及ぶものもあり、凡そは坑底部として捉えられたもので、その構築部位はおそらくは削平等の及んだ上位部位であったと想定されるものの、判然としていないのが実情であった。しかしながら、遺構の陷入状況や其伴遺物を含む遺物の出土状況から、本遺構は凡そ上位部における中世から近世初期にかけての遺物に伴うものと考えられたのである。

ついで4層は黄褐色をした砂土で、

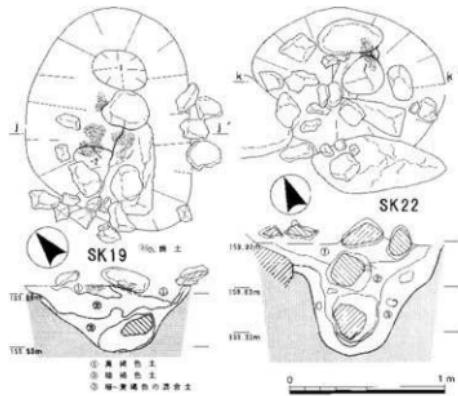
基盤層となる5層の傾斜にしたがって南西方向に向かって堆積し、その逆に上流側となる北東方向に向かっては尖滅するといった状況を看取できた。その5層は黄灰色を呈し、10~80cm大の円礫を含んだもので、実質的には河床疊層と判断して掘削を止めたのである。

### 第3節 遺構

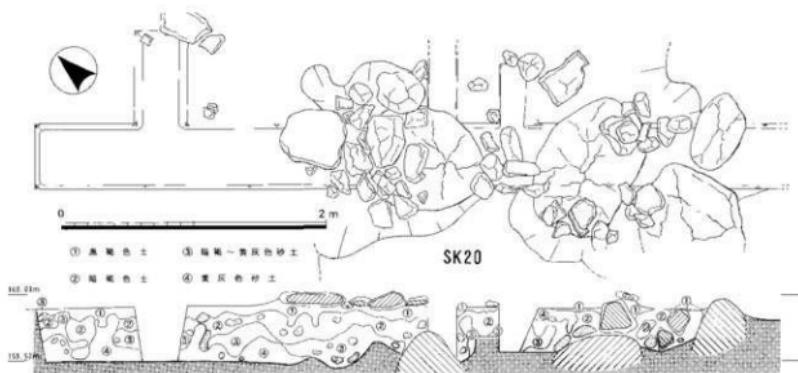
#### 1. はじめに

遺構は、十字トレンチ南辺部およびA・B調査区と地区名別した遺跡範囲から、炉跡を含むSKとした土坑32基、柱穴状のPと略号したもの13基が検出された(第15図・第1表・図版4・5)。

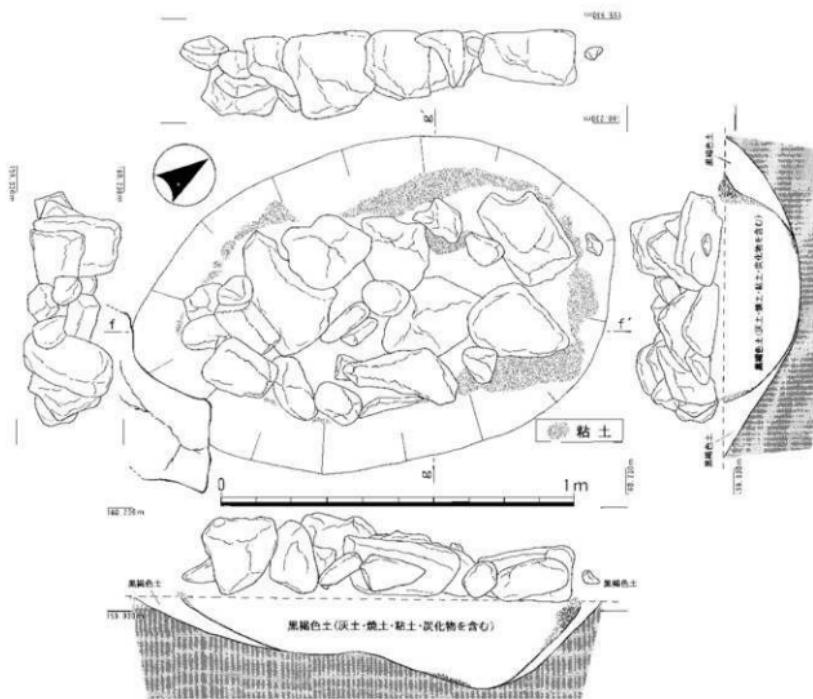
これらは凡そ径40cm以上のものをSKとし、35cm前後以下のものをPと略号することにしたが、なかにはそれ以上のものであっても、その形状からPとしたものもある。その多半は、凡そ3層中位部から下位部にかけて表出したものであり、上位部位に堆積していた黒褐色砂質土が多少の搅乱を伴って陷入して、なかには下位層との混入もみられるといった様相を呈していた。それらは、凡そ焼土痕や炭化物を伴うものが多く、また該当区の南半部には、円礫等が集石状に密集して伴出するといった様相を覗えたもので、その確には被熱により赤褐色化して割れたものや、炭素の付着するもの、そして盤状の円礫なども多く看



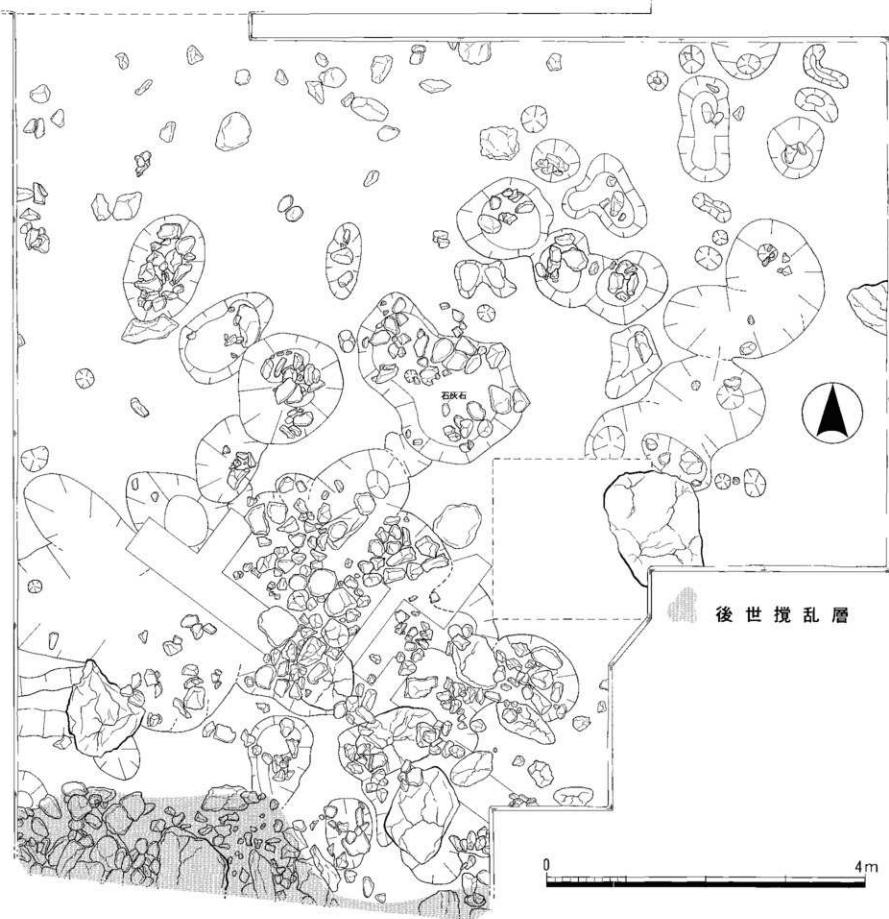
第12図 遺構陷入状況図(5)



第13図 サブトレンチ断面図



第14図 S K 13造構陥入状況図



第15図 構造図

取することができたのである（第7～14図・図版4・5）。

さらに、3層下位部の縄文・弥生期とする層位に、上位部からの嵌入が認められることや、出土遺物の多半は凡そ中世～近世期初頭に伴うものであったという状況から、本層を文化層として捉えることができたものの、一方ではその構築状況にしたがい、過度の削平を受けたと思われる縄文・弥生期にかかる遺構は判然としなかったのである。

なお、遺構の表出した3層中位部下は砂質性の土質を呈して、その坑壁は貧弱で色調差も乏しく、また表出面も明確でなかったことから、部分的には誤測もあったとも思われたのである。以下、その検出状況をみていくことにする。

## 2. 検出遺構

遺構の検出における陥入土の種別は、凡そ①とする黒褐色土、②とする暗褐色土、また①と4層との混合土である③とし、④は基盤層である黄灰色礫上の4種類を検出できたもので、とくに①と②には、遺構によっては焼上や炭化物を少量から多量程度混入するといった様相を窺うことができた。また遺構の断面は、皿状もしくは碗状を呈したものが多く、なかには不整形なものも含まれて、その機能的用途は判然としないものが多半を占めていたのである。

そのうち該区の東半部に検出されたSK05・06（第8図・図版4-5）は、切り合いの想定される2つ土坑が連結したもので、土坑断面は皿状を呈しており、長径はそれぞれ約200～240cmを測って、その機能的用途は判然としていない。また同様の切り合いはSK09（第10図・図版4-6）においてもみられたもので、3つの円形状土坑が連結し、長径が約274cmとなる土坑形を窺うことができたもので、陥入土の堆積状況から、両端坑が後世によるところの構築坑と想像できたのである。

なお前述した集石状に伴出するものは、図示したものではSK09のほかに、SK07（第9図・図版4-6）、SK13（第14図・図版4-7-8）、SK15（第9図・図版5-1-2）、SK16（第11図・図版4-4-5-3）、SK19（第12図・図版5-5）、SK20（第13図・図版4-3-5-7）、SK22（第12図・図版5-6）などでもみられて、その坑内には、①～③の土質がブロック状に混在して陥入したものもなかにはみられたのである。また盤状の円礫等の検出から、住居址等を想定してみたものの、それらの規則性は捉えることができず、その機能的用途は不詳であった。

そして、遺構からの共伴遺物の状況をみてみると、まず石組状に伴出する炉跡としたSK13（第14図）からは、その坑内から瓦器が1点検出されている。またSK15（第9図）では、長径151cm、深さ50cmを測る坑内から土師器が、SK16（第11図）の、長径230m、深さ約30cmを測る坑内から、瓦器・足錆・染付碗のほかに、その上位部からは石灰石（図版5-4）が伴出している。さらに数次の構築が成されたと想定されるSK20からは染付碗のほかに、石臼（図版3-7）も検出されており、中世期から近世期初頭にかけての遺物を確認できたものであった。一方では、その該当構築期における掘削の影響を受けたものか、SK19からは縄文土器、そしてSK19・SK31からは弥生土器が検出されている状況であった。

これらの検出状況からは、凡そその構築年代は推測できるものの、その大半における機能的性格は捉え難いものであったといえようか。しかしながら、他方ではその特徴的な傾向を窺わせるものもあり、以下その検出例をみていく。例えばSK19・SK22（第12図・図版2-7-5-5）では、それぞれ

約130～150cmを測る坑内の表面もしくは中位部からは、少～多量の炭化物の混在とともに、被熱した粘土（焼土）塊が検出されている。また該区の3層上位面から中位面にかけては炭化物や焼上、および焼石や炭素付着礫が多量に散見されるとともに、金屬滓（図版3-8）等も約30点ほど検出されている状況を確認することができた。

そして、SK13（第14回・図版4-7-8）とした遺構は、長径140cm、短径92cm、深さ28cmを測り、楕円形もしくは隅丸方形を呈するタイプの炉跡と想定されたもので、坑内には被熱して黄橙色～黄白色化した粘土を貼った状況が部分的に看取できたのである。その粘土帯の外側は、①とする黒褐色土がめぐり、内側には①に灰土や焼上片・粘土片・炭化物等が混在して陥入していた状況を呈し、共伴遺物は瓦器の1点のみで、また坑内上部の集疊との関わりは明確に捉えることはできなかつたものである。

これらの状況から、本遺構群は鉄・非鉄金属にかかる製鍊・鋳造のいずれに伴うものは明瞭にできないものの、SK16をはじめとする数箇所からの石灰石（図版2-8）等の検出状況や、炉壁に付着して溶解した洋、および焼鉱石（図版8-1）等の検出状況などとあわせて考察すると、銅（非鉄）製鍊場の可能性もあるものとして捉えられる。そのように想定すると、該当期において、石灰石は銅製鍊にかかる原料としての硫化銅鉱などから、鉄や硫黄を吸収し、銅を取り出すための溶媒剤として使用されていたことや、また焼鉱石は、その硫化銅鉱から硫黄をとばすために焼かれたものであったということとも符合することになるだろう。

なお、製鍊もしくは鋳造場として捉えるのであれば、伴出する集疊はカマド的な役割を果たしたものとも考えられ、また銅製鍊場として捉えれば、該当期の炉の構築形態からSK13においては、湯口（からみ捨て場）と炉との2段階形状であったか、もしくは炉の重複した可能性も窺えることになる。いずれにしても本遺跡を特徴付ける出土遺物は少量であり、また検出遺構も不明瞭なものが大半であったことから、産銅に特定したものではなく、広義に金属工房としての可能性を言及するにとどめたのである。

（山本 浩之）

参考文献：池田善文「季刊考古学 古代・中世の銅生産」

「長門国長登銅山跡にみる生産遺構」1998.2.1

：神崎 勝「 同 上 」

「古代・中世の産銅遺跡の調査」1998.2.1

：佐々木実ほか「鉄と銅の生産の歴史」2002.2.20

第4章 出土遺物

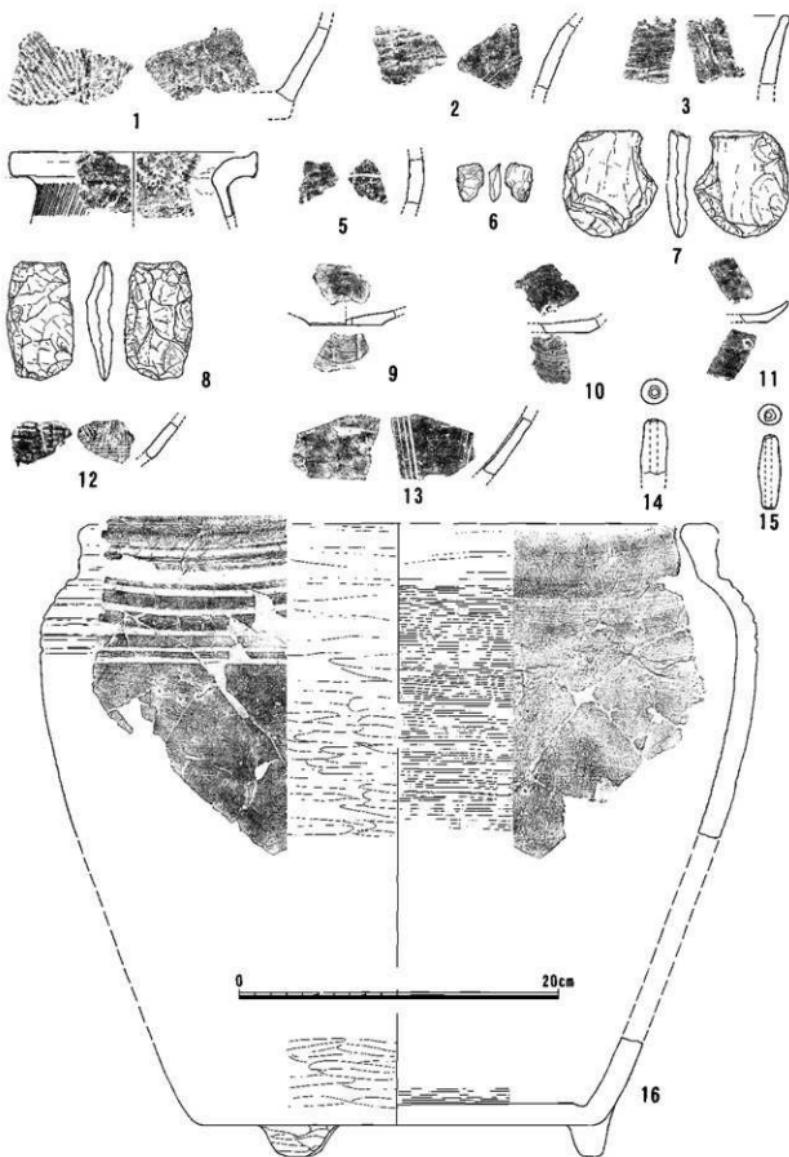
## 第1節 はじめに

本發掘調査では、元位置記録法に従い、遺物の採り上げを行なった。ただし、耕作上の1層と客室の2層においては、調査区、層位名のみを記し、採集するに留めた。また、それ以外のものにも、庵土、および遺跡周辺部で採集したものがある。

本遺跡から出土した遺物総数は760点を数え、その内訳は、陶磁器類の586点（77.3%）が主體であり、瓦質器の33点（4.3%）、石灰塊の26点（3.4%）、上師器25点（3.2%）、金属洋25点（3.2%）がこれに次ぐ。このほか、僅少ながら、縄文・弥生上器片が出土していることから、縄文期・弥生期に遭跡が形成されたことは確かではあるが、中近世期における削平を受けた為か、当該期の具体的な生活址を浮き彫りにすることはできなかった。

最も多出した陶磁器類は、その大半が近世あるいは近代の所産ではあるものの、15~16世紀のものと想定される中国製陶磁器が44点を数え、なかでも、青磁盤といった奢侈品が出土したことは目を引く。また、注意されるのは、総重3603.1gを量る石灰塊、911.4gを量る金属滓の出土である。これらは、検出された石組状炉とあわせて、本遺跡を性格づけるものであろう。以下、特徴的な資料を抽出出し、みていくこととしたい。

第2表 遺物集計表



第16図 遺物実測図 (1)

## 第2節 実測遺物（第16・17・18図・図版7・8）

1～3は、縄文土器である。1は、体部下位部片である。外面は縦位の二枚貝条痕が顯著であるが、内面はナデとする。2は、両面ともにナデとするものの、外面には、接合痕が看取される。3は、口縁端部に刻みを有する口縁部片である。外面は条痕地を残すナデ、内面はナデとする。晩期の所産であろう。

4は、弥生後期の甕の口縁部片である。「く」字状に屈曲する頸部にはヘラによる斜線文を押捺させ、口縁端部はやや拡張させている。外面はヘラミガキ、内面はナデとし、色調は赤橙色を呈する。5は、調整、色調からみて、前者と同様であり、弥生土器に比定しておきたい。

6～8は、石器類である。このうち、6は姫島産黒曜石の剥片である。腹面には主割離面を留め、両面ともに、周辺部には加工が認められない。重量3.4gを量る。7・8は打製石斧である。7は、基部を欠損するものの、刃部にかけて幅広となる撥形を呈するものである。刃部には磨耗痕が認められる。8は、長幅8.8cmを測る小振りの短圓形を呈するもの。全面は腐朽し、青灰色を呈する。石材は凝灰岩質である。

9～11は、土師質皿である。9・10（図版3－3）は底面を回転糸切りとし、底部内面は静止ナデとする。11は、底面を静止糸切りとし、内外面は静止ナデとする。

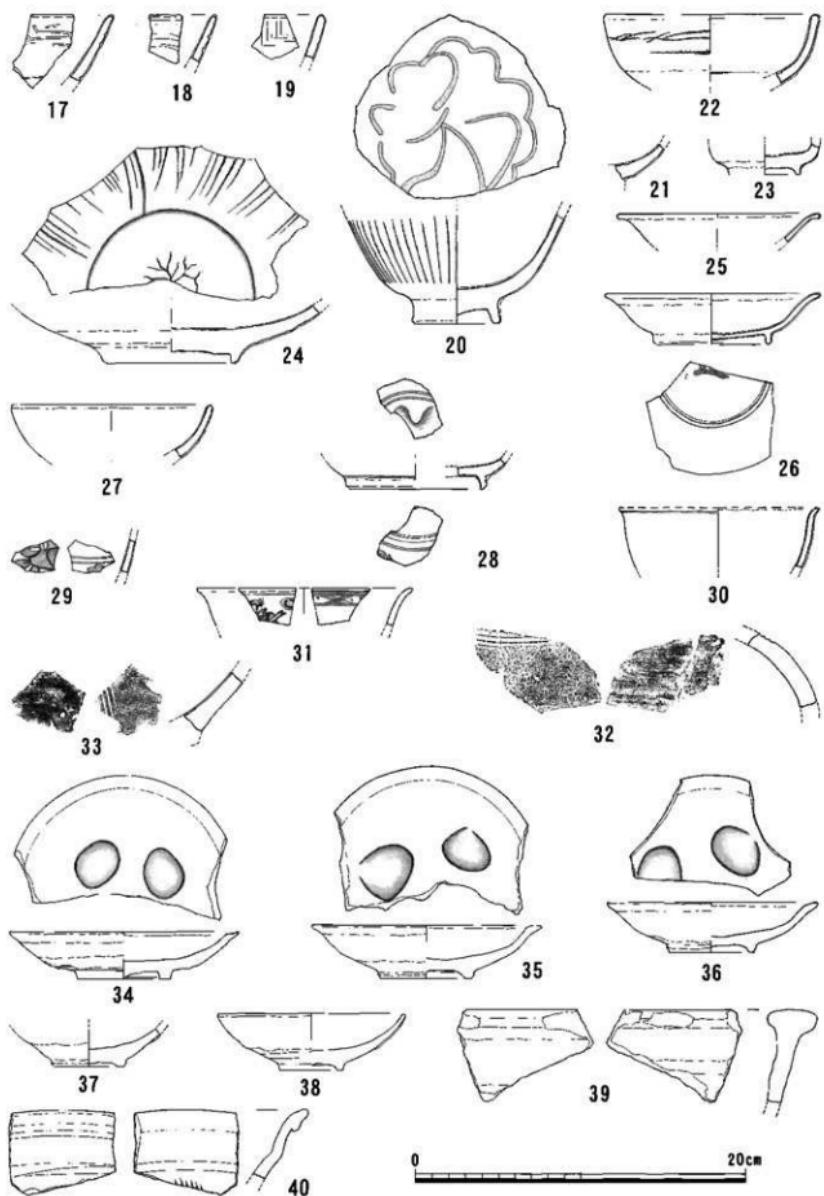
12・13・16は瓦質土器である。このうち、12は、外面に格子目状のタタキ目、内面は縦横にハケメを残す瓦質の鍋である。13は、内面に4条の御目がみられる擂鉢。16は、瓦質の火鉢である（図版3－2）。復元II縁39.2cm、器高40cm、底径25cmを測り、底部には脚部が貼り付けられる。復元すると、三足となろう。外面調整は、口縁端部から体部にかけてヘラミガキがなされ、底部はヘラナデとする。内面調整は、口縁部から体部にハケ目が施され、底部内面はナデとする。

14・15は、いずれも土師質の土鍤である。このうち、14は一方の端部を扭欠する。外面、胎土とともに褐色を呈しており、焼成は不良。15は完形品で、長さ4.6cm、重さ6.5gを測る。色調は橙色で、前者に比べ、焼成は良好といえる。

17～45は、陶磁器類である。このうち、17～24は青磁である。17は、外面に曲線による雷文帶を有する塊の口縁部片。釉は淡緑色を、器肉は灰白色を呈し、胎土は緻密である。18は、前者に比べ、不明瞭な雷文帶を描くもの。器肉は灰色を呈し、胎土は緻密であるが、釉には貫入が看取される。前者に比べ、優品とはいえない。19は、直線による雷文帶を描く塊の口縁部片。灰緑色を呈し、器肉は白灰色を呈する。22は、口縁外面にくずれた雷文帶を描く塊の口縁部片。色調は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。これらの雷文帶を有する塊は、15～16世紀に想定されるものである。

20は、外面に細線連介文、内面に花状模様を有する青磁塊である（図版3－4）。釉は骨付を越えて高台内面途中までかかり、削り取りはなされない。外底は露胎のままである。胎土は粗く、灰褐色を呈する。釉は灰黄緑色を呈し、貫入を伴う。焼成は不良といえる。21も、同じく細線連介文を描く青磁塊の腰部片である。色調は、薄緑色を呈する。いずれも16世紀に想定されるものである。

23は、青磁塊の底部片である。釉は灰緑色を呈し、貫入がみられ、外底の釉は、削り取りがなさない。色調は、外底は橙色、胎土は灰色を呈し、焼成は不良である。



第17図 遺物実測図 (2)

24は、青磁盤の底部片である(図版3-5)。見込みに印花文と放射状の刻線を有する。淡緑色を呈する釉は、外底の一部に及び、削り取りはなされない。胎土は灰白色を呈し、緻密である。

25-27は白磁皿。25は外反する口縁部片で、釉には貫入が看取される。26は、復元口縁13.2cmを測るもの(図版3-6)。外底には染付がみられるものの、判然としない。高台はやや高く立ち、豊付には砂が付着する。II縁は端返の造りである。釉は灰白色を呈し、胎土は緻密である。27は、丸みおびる口縁部片である。釉は貫入を伴い、黄色味をおびる。いずれも、15-16世紀の所産と想定されるものである。

28-31は、中国製の染付。このうち、28-30は白磁青花である。28は、塊の底部片で、豊付を除いて施釉がなされる。文様は、内外面ともに文様帶図画を為す同心円文がめぐらせ、その内部には草花文が描かれている。29は、前者と同様の文様モチーフを有する塊ないし、IIIとみなされるもの。いずれも16世紀半ばの所産であろう。30は、端反塊である。端部を損欠するが、その下位には横線がめぐる。31は、赤絵の染付塊。白色の釉を素地として、その外面には赤絵による人物文、内面には、閻文が入れられている。胎土は灰白色を呈し、緻密。15-16世紀のものであろう。

32-45は、国産陶磁器類。このうち、32・33は備前焼である。32は、壺の肩部片である。外面には2条の沈線がめぐる。33は、内面に4条の御目を有する擂鉢である。

34-36は、17世紀初頭と想定される肥前系の皿である。藁灰釉が内面、及び、体部外面にかかる。内面見込には重ね焼きのため、貝目を置いている。

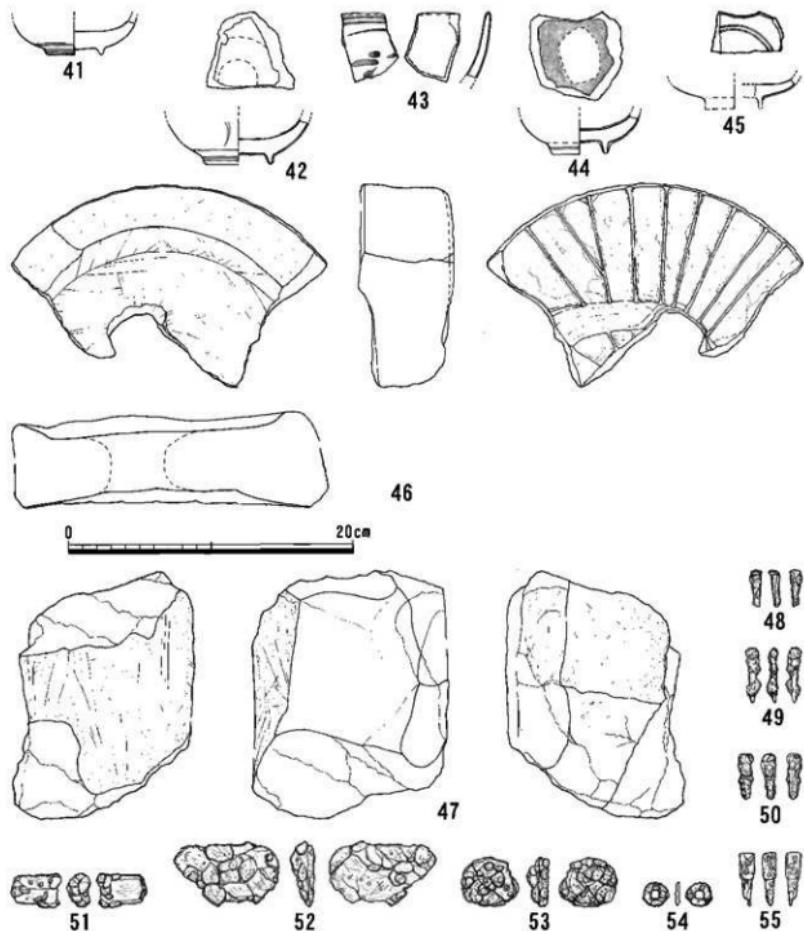
37は、器高3.3cmを測る小塊。鉛色の釉が施され、胎土は橙褐色を呈する。38も、同類であろう。近世初頭の肥前系と考えられる。39は、大壺の口縁部片である。近世期の九州系のものであろう。40は、口縁端部を折返して成形した擂鉢の口縁部片。内面には6条の御目が看取される。同じく近世期の肥前系であろう。

41・42は伊万里焼の塊で、いずれも底部片である。41は全面に釉が施され、外面の高台および、体部には呂須による同心円文が描かれている。42は、見込の釉を輪状に搔き取っており、近世以降とみなされるもの。同心円文の上位には草文とおもわれる文様が描かれている。43・44は肥前系の塊である。43は、口縁外面に染付が施される。釉は貫入を伴う灰白色、胎土は灰色を呈する。44は、全面に釉がかかり、内面見込中央は透明釉とするが、他は灰白色の釉がかかる。高台外面には線文がめぐる。45は、外面に青みおびる透明釉、内面は白色釉のかけ分けが行なわれるもの。内面見込には同心円文を有する。

46は、玄表石製の挽臼(上臼)である(図版3-7)。目の間隔は1.4-2.5cmと均一でなく、粗い造り。日の方向からみて、反時計まわりのものである。47は、砂岩質の砥石。背腹二面に研磨面を有し、擦痕が看取される。

48-54は、鉄製品である。このうち、48-50は釘。48は、頭部と先端部を損欠するものの、残存する軸部は、わずかに湾曲する。49は頭部を損欠、50は先端部を損欠する。頭部は逆L字形である。これらはいずれも、軸部断面形は方形である。

51は、鉄鎌の片口とおもわれるもの。52・53は板状を呈するものであるが、器種は判然としない。54は、1.6×1.6cmを測る円形のII金。55は、銅製の煙管である。



第18図 遺物実測図 (3)

以下は実測はしていないが、気付いた点を記述しておくことにしたい。

56~63は金属滓である。このうち、56は焼鉱石である。また64・65は、石灰石。熔媒剤として用いられたものであろう。64は重量1044.7 g、65は330.0 gを量る。

以上で終えることにするが、とくに本章においては別府大学大学院生の渡辺聰君に種々の面でご教示いただいたことを、ここに記してお礼を申し上げるものである。

(山本 浩之)



鳥瞰する調査地点と周辺部

図版 2



1. A調査区の北壁（南西から）



2. A調査区の東壁（南西から）



3. B調査区の西壁（南東から）



4. B調査区の南壁（北東から）



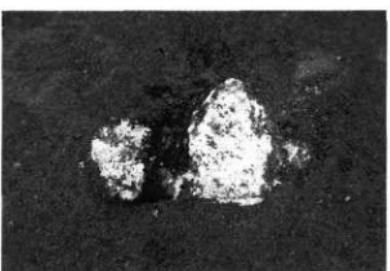
5. 遺物の出土状況（南東から）



6. 遺物の出土状況（北東から）



7. 焼土の出土状況



8. 石灰石の出土状況



1. 弥生土器の出土状況



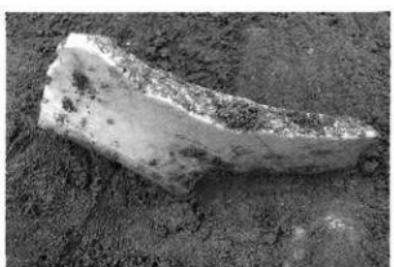
2. 瓦器の出土状況



3. 土師器の出土状況



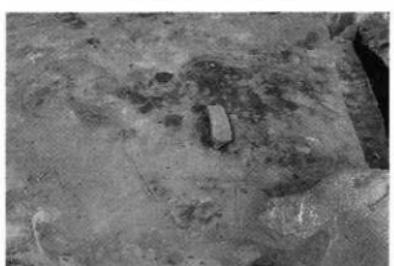
4. 陶磁器の出土状況



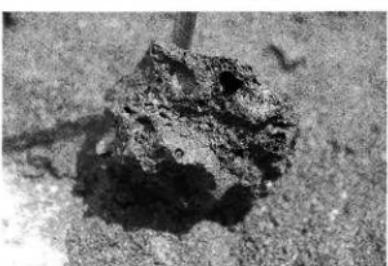
5. 陶磁器の出土状況



6. 陶磁器の出土状況



7. 石臼の出土状況



8. 金属滓の出土状況

図版 4



1. A・B調査区に露頭した集石群（北から）



2. A・B調査区に露頭した集石群（南から）



3. SK 20の上面に検出された集石（西から）



4. SK 16の上面にみられた焼石（北から）



5. SK 02~06の表出状況（東から）



6. SK 09の表出状況（南西から）



7. SK 13の表出状況（北西から）



8. SK 13の表出状況（北東から）



1. SK 15の半截状況（南東から）



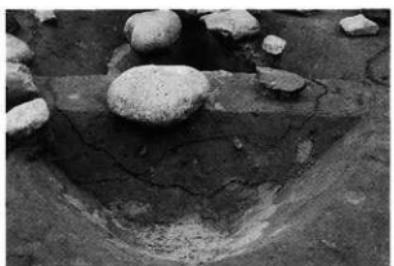
2. SK 15の検出状況（南東から）



3. SK 16の半截状況（南西から）



4. SK 16に検出された石灰石（南西から）



5. SK 19の半截状況（北東から）



6. SK 22の4分法による検出状況（北東から）



7. サブトレンチにおける遺構の検出状況（南西から）



8. サブトレンチにみられる遺構の陥入状況（西から）

図版 6



1. A 調査区東半の遺構検出状況（南西から）



2. B 調査区の遺構検出状況（北東から）



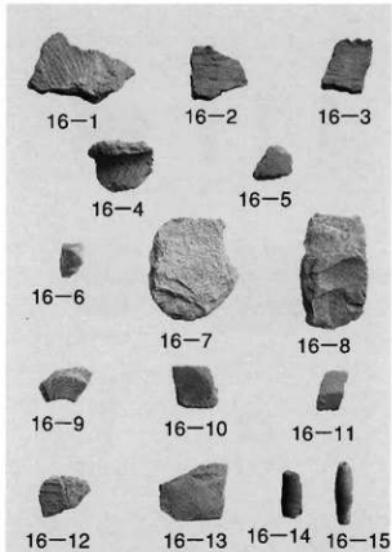
3. 十字トレンチ北辺部の完掘状況（南から）



4. 十字トレンチ東一西辺部の完掘状況（東から）



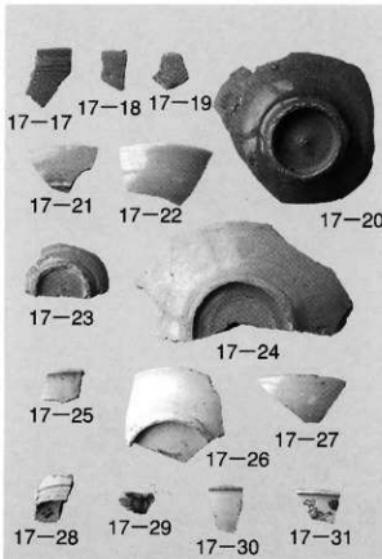
5. 調査区の遺構完掘状況（南から）



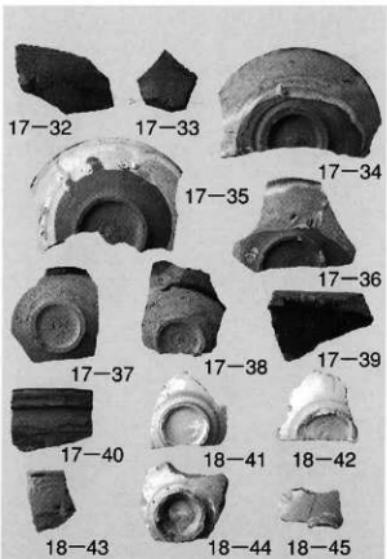
1. 繩文土器・弥生土器・石器・土器・瓦器類



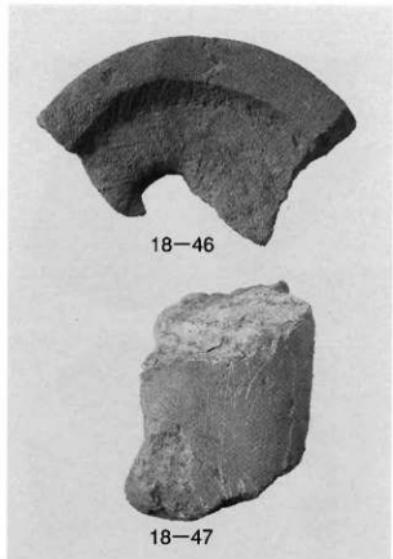
2. 瓦器類



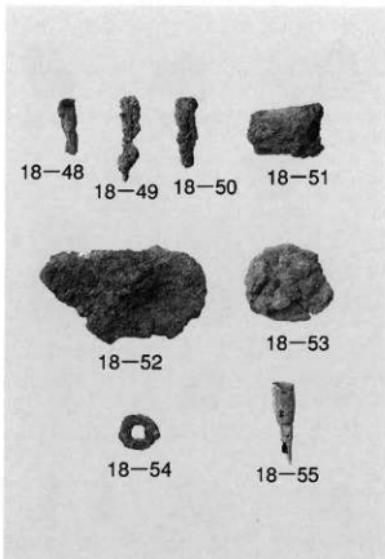
3. 输入陶磁器類



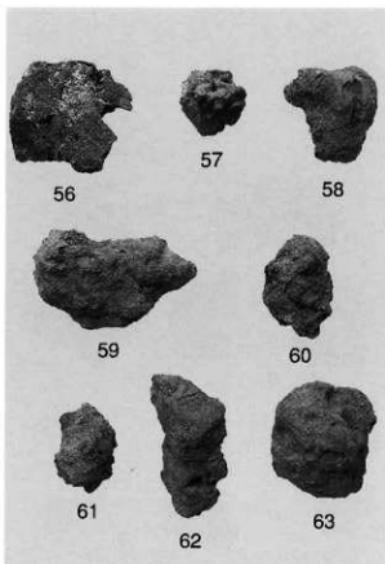
4. 国産陶磁器類



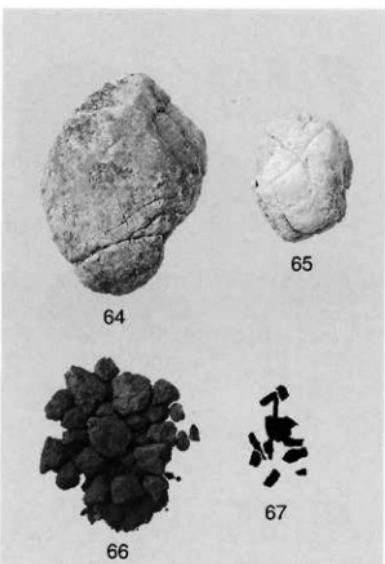
1. 石臼・砥石



2. 金属器類



3. 金属滓



4. 石灰石・焼土・炭化物

平成15年3月10日 印刷  
平成15年3月17日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第43集

## 長尾原遺跡

発行 匹見町教育委員会  
島根県美濃郡匹見町大字匹見41260  
印刷 株式会社 谷口印刷  
島根県松江市東長江町902-59